評論

『不平等の哲学』

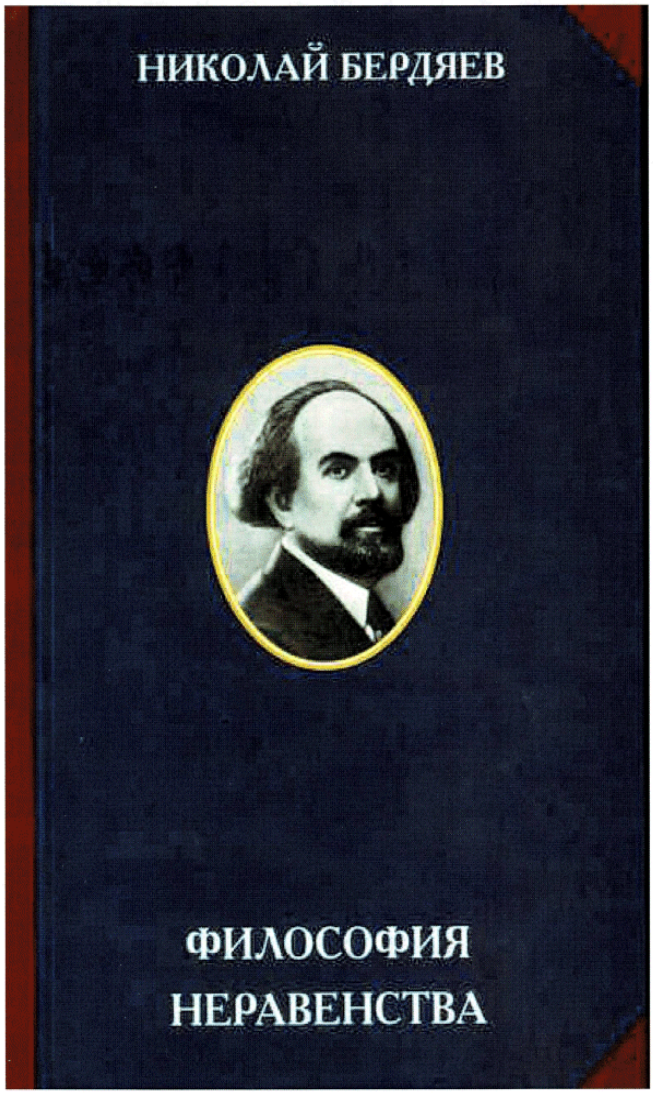
（ベルジャーエフ、一九一八年執筆、一九二三年刊行）第七書簡　リベラリズムについて

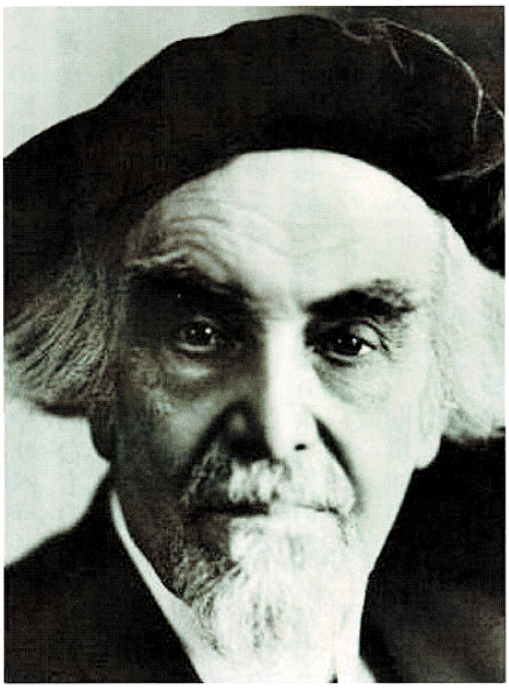
（翻訳）渡辺　雅司
わたなべ　まさじ

「リベラリズム」という言葉は「自由」という美しい言葉から派生しているにもかかわらず、一切の魅力を失ってもう久しい。自由によって大衆を誘惑する事はできない。大衆は自由など信頼していないし、自由を自らの必須の利害と結びつける能力もない。実際、自由の中には、民衆的というよりむしろ貴族的なものがあるのである。これは多数派よりも少数派にとってより貴重な価値であり、何よりもまずリーチノスチ（注）とか個人といったものにかかわるものなのだ。

革命の中でリベラリズムが勝利したことは決してない。社会革命だけでなく、政治革命においてもリベラリズムが勝利したことはなかった。なぜならどんな革命でも、大衆が立ち上がったからである。大衆というものは常に自由のパトスではなく、平等のパトスを抱いているからだ。しかも大きな革命の動因となったのは自由ではなく、平等の原理であった。リベラルな精神とは本来革命的な精神ではない。リベラリズムとは社会の文化的階層の気質であり、世界観である。そこには荒々しい自然力もなければ、心情を燃え上がらせる炎もない。そこにあるのは穏健さであり、あまりにも大きな形式性である。リベラリズムの真実とは、形式的な真実である。それは生の内実について、肯定的なことも否定的なことも一切語らない。それは各人にあらゆる生の内実を保証しようとするだろう。

リベラルな思想は宗教に類したものに変ずる能力は持たないし、宗教的な感情を煽ることもない。これがリベラルな思想の弱さなのだが、これはその長所でもある。デモクラシー、社会主義、アナーキズムといった思想は人間の生に内実を与えると主張する。それらは容易に疑似宗教に変貌し、それ自体に宗教的性質の対応を迫るものである。しかしここにこそ、そうした思想の虚偽の根源がある。なぜならそこにはいかなる精神的内実もなければ、悲壮なまでに宗教的な態度にあたるようなものも何もないからである。





宗教的感情をそれに値しない対象に縛りつけることは、大いなる虚偽であり、誘惑である。リベラリズムはこうしたそのかしはしないということは認めるべきである。

デモクラティックな思想は、リベラルな思想よりははるかに形式的なものだが、それは人間的生の内実、人間的生の特別の型を詐称する。だからこそそこには毒蛇の誘惑が潜んでいるのである。社会主義思想は無制限な要求を特徴とする。本来、生の手段、生の物質的道具にすぎないのに、それは生の目的を立てることを要求する。諸君はとっくの昔に相対的手段であるところのものを、神格化、絶対化してしまい、ほとんど宗教的とでも言うべき感情をそれに縛りつけ、かくて生の目的も諸君にとってはかすんでしまったのだった。諸君の共同性、社会性の宗教は目的ではなく手段の宗教である。実際、外面的な共同性においては、全ては手段の問題である。

目的はもっと深いところに立てられるべきである。目的は社会的なものではなく、精神的なものである。そして人々の精神的公共性、彼らの内面的共同性自体、

社会の外面的基準によっては定義されえないものである。なぜなら生の目的と内実は精神的深淵からとられたものであり、神の現実に根ざしているからである。これに対し、社会的環境はこれら目的やこの内実の実現のための複雑な手段の総体なのである。それゆえすべて、社会的思想といったものは絶望的なまでにどうしようもなく形式的であり、そこではけっして真の内実や目的に到達することはできず、そこで存在論的核心を捉えることはできないのである。

では、リベラリズムにそうした存在論的核心といったものがあるだろうか？リベラルな思想を闇雲に信じ、リベラリズムの原則を信奉する人たちやリベラルな運動、党派の中には存在論的なものがあまりにも少なすぎる。たいていの場合それは表面的な人々であり、表面的な運動である。しかしながらリベラルな思想の根源においては、デモクラシーや社会主義思想の根源におけるよりも、生の存在論的核心とのより大きな結びつきがある。なぜなら人間、人格、人間精神の自由と権利は事実、普通選挙権とか生産手段の社会化などよりも生の精神的根幹と大きく結ばれているのだから。功利的な目的の名において疎外されることのない人間の自由や権利は、人間精神の奥深くに根づいている。そしてリベラリズムがそれを主張する以上、リベラリズムは存在論的基盤を持つリーチノスチの本性と結ばれている。リベラリズムを実証主義的に根拠づけることはできない。それは形而上学的にのみ可能なのである。人間の実証主義的根拠づけ（そんなものが必要とされたとしての話だが）にできることは神聖なる人間の権利を奪うことだけである。リベラリズムの形而上学的本性を、かなり極端かつ一面的な形ではあるが、よく理解し、根拠づけたのはチチェーリンだった。

もしも生身の人間が永遠の精神的本性を持たず、単に社会環境の反映に過ぎないとしたら、それに不可分の自由や権利を認める根拠はない。ルソーは徹底して社会の主権性を承認し、人間の不可分の自由と権利を否定せざるをえなくなった。同じようにマルクスもこれらの自由や権利を否定した。実証主義的なリベラルは、意識が一貫せず、表面的であるばかりに、人間の不可分の自由と権利を進んで認めようとしているに過ぎない。人間の自由と権利の精神的根源は、宗教的良心の自由と権利である。そしてこの点でリベラリズムの形式的真実は人間生活の存在論的核心と触れ合うのである。人間、市民の権利は英国の宗教革命で宣言された良心の自由にその精神的根拠を持っている。この真理はますます公認されてきている。しかし不可分かつ神聖な人間の自由と権利をより深いところで根拠づけているのは人間精神の無限の本性を認め、外的な国家や社会の無制限の侵害からそれを守ろうとするキリストの教会である。これは世界教会の永遠の真理であり、宗教改革では複雑な歴史的条件によって引き起こされた一面的表現を見ただけであった。その人間的な、あまりに人間的な（非常に誇張された）カトリックの悪用は、そこにはすでに人間精神の無限の権利の承認がこめられているという真理を隠すべきではない。宗教改革は欠けた形ではあるが、それでも教会から霊的に受けとったものである。

生身の人間の真の自由はキリスト教起源のものであるということは、古代世界は個人の自由など知らず、知っていたのは公衆の自由のみだったということからも明らか

である。すでにベンジャミン・コンスタンは政治的自由の古代の解釈と現代の解釈の間に大きな違いがあることを強調した。これは異教的意識とキリスト教的意識との間の差異である。異教的宗教意識の土壌にあっては、自由というものを、それがギリシャ的民主制のなかで理解されたように理解することも可能だった。しかしながら、生身の個人の無限の精神的本性を認識してしまったキリスト教的宗教意識にさらされてからというもの、自由をそのように理解できなくなった。ルソーの教えは異教的意識の再来だった。ルソーは個の自由を知らないし、社会から独立した人間の精神的本性を知らない。つまりそうした精神的本性の不可分の権利を知らないのである。彼は良心の自由を否定し、社会と、主権者としての人民に良心を隷属化させたのだった。彼の政治的自由の意識はしたがって、キリスト教以前の意識なのである。かくてルソー、マルクスの後塵を拝する諸君、生身の個人の現実的な自由を幻のような社会的自由でもって代替させた諸君は全員、異教徒、キリスト教からの背教者なのである。諸君にとっては、内面的、精神的現実をともなった人間というのは存在せず、存在しているのは社会的外皮をかぶった人間だけなのである。人民主権という新たな神の名において、諸君は人間からその全ての権利を剥奪するのである。人間というものは、教会、民族、国家といった実在と深い存在論的関係を有するものである。しかし普通選挙権、産業の社会化、諸君のいう集団主義という産業にどんな存在論的なものがあるというのか？　そうした虚構、幻影のためになぜ人間は自分の権利を犠牲にし、自分の本性を制限しなくてはならないのか？

理想主義的なリベラリズムには上質の意識の射光が見られたし、人間本性にたいして、より大きな注意が払われていた。しかしながらこうした射光も、表面的な「啓蒙主義」によって覆い隠されてしまった。なぜなら、「啓蒙主義」とはけっして意識を深く啓蒙するものではないからだ。その光は太陽の光ではない。それは真の光への欲求そのものを弱体化してしまう人工的なランプの光なのだ。真の光の王国に参入したいという渇望を感じるためには、まったき闇、意識の夜を通り抜けたほうがよいということになる。広くひろまったリベラルなイデオロギーはこうした表面的な啓蒙主義とあまりに癒着してしまい、その中でより高次の真実の閃光はかき消されてしまった。リベラリズムは存在論的根拠をすべて失った命を引きずっており、それはいわば濁らされた真実のなけなしのかけらを食って生きている。かくて独立した精神現象としてはリベラリズムはみなされなくなってしまった。

リベラリズムがあまりにも徹底して飛び散り、骨抜きにされてしまったので、リベラリズムの要素を認めることなら可能としても、信念、最終的世界観において自由主義者たることはもはや不可能になっている。リベラリズムは独立した原理ではなくなり、ある種の妥協、半デモクラシーないし半保守主義となってしまったのである。リベラリズムは民主主義あるいは社会主義の信仰に別の戦術、別の利害を対置するが、別の信仰、別の思想を対置する力はもはやない。あまりにしばしば信念の薄弱な者、思想で自らをへばらしたくない者が自由主義者になる。自由主義陣営では熱心な布教活動はありえない。あまりにしばしば自由主義者自身が、よりラジカルで極端な思想

の前で尻込みしてしまい、革命家タイプに屈してしまい、自分は革命的信念や革命行動に与する値打ちもない者と考えてしまう。自由主義者とは穏健派、妥協の人、日和見主義者の同意語になってしまった。だが、革命的社会主義者とは異なる自分の思想を持った者、最後まで自分の原理に忠実な者をはたして穏健派とか日和見主義者と呼ぶことができるだろうか？自由主義者は通常革命家の前で道徳的に尻込みしてしまい、彼らに対し別の、より高次の道徳的真実を対置することができない。リベラリズムのそうした消失感、無気力感は何によって説明できるのか？　なぜ彼らの場合、民主主義や社会主義によって提起されたものよりもより高次の真実の閃光が消えてしまったのか？

「真理を認識せよ。すれば真理は諸君を自由にするであろう」「主の霊のあるところ、そこには自由もあり」――解放の原理はまさにこのような深さで根拠づけられねばならないのだ。事実キリスト教は人間を隷属から解放することを欲する。罪への隷属、下品な本性への隷属、現世の魔力への隷属から。そしてここにこそ真の「リベラリズム」の根拠を探し求めねばならない。真の人間解放とは、外的隷属からだけではなく、内的隷属すなわち自分自身、自分の欲望、自分の下劣さへの隷属からの解放でなくてはならない。啓蒙主義的解放者である諸君はこのことを思ってもみなかった。諸君は内的隷属の中に人間を置き去りにし、彼の権利、つまり低劣な奴隷的本能の権利を唱えているのだ。諸君のリベラリズムの根底には内的欠陥がある。だからこそそれは堕落せざるを得ないのだ。諸君のリベラリズムは自身の唯一可能な精神的根拠に宿命的にそむいてしまったのだ。

諸君は人間の権利の宣言をすることによって、神の権利の宣言から根拠をもぎ取ってしまったのだ。これぞ諸君が罰を受けねばならない原罪である。神治は自治よりも高いのだ。このことを深く理解したのはジョゼフ・ド・メーストルを筆頭とする十九世紀フランスのカトリック学派だった。そしてこの学派は忘れられた神権の承認を要求し、議論の余地ない人権を忘却するほどにまで、この神聖なる宣言を要求したのだった。なぜなら諸君は神の権利を忘れ、人間の権利の宣言は人間の義務の宣言と結びつかねばならないことを忘れたのだ。人間の権利が人間の義務と切り離された道は、諸君を善へと導くことはなかった。この道で諸君のリベラリズムは退化してしまったのである。義務の意識を欠いた権利の要求は人間の利害と欲望の闘争へ、互いに排他的な要求の道へと追いやった。人間の権利とはそうした権利を尊重する義務を前提とする。人権を実行に移す上で、もっとも重要なのは、自分自身の権利要求ではなく、他者の権利の尊重、各人がもつ人間像の尊重、つまり人間の人間に対する、人間の神に対する義務なのである。人間の義務は人間の権利よりも深いものであり、それこそが人間の権利を根拠づけるものなのだ。権利は義務から出てくる。万人が非常に強く権利を意識し、義務の意識が極度に弱い場合、権利は誰によっても尊重されず、実現されることもないであろう。人間の権利も、人間の義務も神の似姿としての人間の本性に根ざしているのだ。もしも人間が自然や社会環境の似姿、外的諸条件の反映、必然性の落とし子に過ぎないならば、人間には聖なる権利も、聖なる義務もない、つまり彼にあるのは利害と要求だけとなる。人間の権利は神の権利を前提とするものであり、それは何よりもまず、人間の中にある神の権利、人間の中にある神的なものの

権利、その神の似姿、神の子としての権利なのである。

人間は無限の精神である限りにおいて、その深さが神の現実にまで入り込む限りにおいて、無限の権利を有するに過ぎないのである。人間のリーチノスチは自足するものではなく、それは神の存在、神的価値の存在を前提とする。完成され訓練された動物としての人間の神聖なる権利、つまりそこで一瞬、生命が燃えるような一握の灰としての人間の神聖な権利の唱道などといったものが果たして可能だろうか？　人権とは存在論的根拠を持たねばならず、それは永遠の相のもとの人間の魂の実在、この魂を無限に凌駕する魂の実在、つまり神の実在を前提とする。このことを諸君の啓蒙されたリベラリズム、諸君のラジカリズムは忘却しているのだ。それだからこそリベラリズムは風化せずにはおかず、それはいかなる人権も実現できないのである。抽象的で空論的なリベラリズム、自らの空虚さを恃むリベラリズムは堪え難い虚偽であり、それに対しては社会生活の現実的内容を模索する別の運動が必ずや起こるであろう。

リベラリズムのイデオロギーは自然調和を主張する傾向があった十八世紀の知的雰囲気の中で生まれた。このイデオロギーは自由と平等の自然調和、これら諸原理の内的類縁性に対する信仰に貫かれていた。フランス革命は平等を自由と完全に混同してしまった。十九世紀全体はこの自然調和の幻影を破壊し、妥協の余地なき矛盾と対立をとことん暴きだしたのだった。平等はもっとも恐るべき暴政の危険をもたらすことが暴き出された。自由は経済的奴隷制からの解放を保障するものではないことが暴きだされた。自由と平等の抽象的原理はいかなる完全な社会も生まず、人間の権利を保証するものでないことが暴きだされた。自由と平等の間にあるのは調和ではなく、非妥協的な対立なのである。十九世紀はこの自由と平等のドラマである。そして自由と平等の調和的結合の夢は実現不能な合理主義的ユートピアである。個人の要求と社会の要求、自由への意志と平等への意志との和合は決してありえない。抽象的リベラリズムは抽象的社会主義と同様、この課題を解決する力はない。それは円と同面積の正方形といった作図不能なものなのだ。実証的、合理的な局面ではこの課題は実現されえない。抑えがたい自由への欲求と抑えがたい平等への欲求の衝突が絶えず生じるであろう。平等への渇望は常に人間の自由にとってもっとも恐るべき危険となるであろう。平等への意志は人権、神権に対して叛旗を翻すであろう。

実証主義的リベラル、実証主義的社会主義者である諸君はみな、この問題の悲劇性をまったく理解していない。自由と平等は相容れないものである。自由とはなによりもまず不平等への権利である。平等はなによりも自由に対する侵害、自由の制限である。数学的点ではなく生身の人間の自由は質的な差異化、向上、おのが生の容量、価値を拡大する権利のなかで実現される。自由は生の質的内実と結ばれている。ところが平等はあらゆる質的差異、質的内実にそむくもの、あらゆる向上の権利に反するものなのである。十九世紀のもっとも優れた繊細な政治思想家トクヴィルは最初に、自由と平等の悲劇的な対立をはっきりと自覚し、平等の精神がおのずともたらす大きな危険性を察知したのだった。「わたしの考えでは、――この高貴な思想家は言う――何よりも容易なのは社会的身分が平等であるような民衆の間に絶対的で、専制的な政府を樹立する事である。そしてひ

とたびそうした政府が樹立されれば、それは人々を圧迫するばかりか、時とともに各人から人間に本来固有の基本的資質の多くを奪い去ってしまうとわたしは想定する。だから民主的な時代にもっとも恐るべきは専制なのだとわたしには思えるのである。」

平準化、ヨーロッパ版の中国的専制に対するこうした高貴な恐怖は、ジョン・スチュアート・ミルにも見られる。彼もまた平等に取りつかれた民主社会における生身の人間の運命に不安を覚えたのだった。十八世紀の幻影、フランス革命の幻影は粉砕された。自由は平等への抑えがたい意志を解き放ち、自己否定と自己殲滅の種を内に潜ませている。リベラリズムはデモクラシーを生み、いやおうなく民主制へと移行する。リベラリズムの徹底的発展とはそうしたものなのだ。しかしデモクラシーはリベラリズムの根底そのものを撲滅し、平等が自由をむさぼり食う。これはフランス革命の過程でもすでに露呈した。「九三年」は「八九年」の人権ならびに市民権の宣言を一掃したのだった。それは宿命的プロセスだった。

自由と平等の矛盾、個人の権利と社会の権利の矛盾は、自然的、合理的秩序のもとでは克服しがたく、解決不能なものなのだ。それが克服され解決されるのは、恩寵ある秩序、つまり教会の生活の中だけなのだ。宗教的交わり、教会社会にあっては、個人と社会の矛盾が取り除かれ、そこでは自由が友愛となり、キリストにおける自由がキリストにおける友愛となる。精神的な共同性（ソボールノスチ）が、この永遠の矛盾を解決するのである。そこでは権利と義務の差異もなく、矛盾対立もない。しかし教会社会には機械的平等はなく、そこにあるのは友愛だけである。しかもそこでの自由は自己を隣人たる他者に対置することではない。宗教的交わりはリベラリズムも民主主義も知らないところの愛と恩寵に則っているのだ。だからこそそこでは人間生活の根本的二律背反、熾烈な対立が解決されるのである。

リベラリズムの内的発展は民主的平等へと導き、それは自由と避けがたい矛盾関係になる。しかし他方で、リベラリズムは解体と退化の危機にさらされる。リベラルな思想それ自体にはいまだ「ブルジョア的」なものは何もない。自由の中には「ブルジョア的」なものはないのである。わたしは嫌悪をもって、諸君のお気に入りの、卑俗で薄っぺらな、存在論的意味をまったく持たない言葉を使っている。諸君が「ブルジョア性」の何たるかを知っており、それについて語る資格があるとはわたしは思っていない。というのも諸君自身が、それにどっぷり浸っているのだから。しかし経済生活における抽象的リベラリズムの支配はその悪しき否定的結果をもたらしたと認めざるを得ない。マンチェスター派が一定の歴史的時代にそれなりに正当化を受けたにせよ、その後の自由経済主義の無制限な支配はリベラルな思想の信用を失墜させ、解体させたにすぎなかった。何者にも制限されない経済的個人主義、全ての経済活動をエゴイスティックな闘争と競争の支配に委ね、いかなる規制的原理も認めようとしない経済的個人主義は、リベラリズムの精神的中核、つまり人権の確立とはまるでいささかの関係も持たないかのようである。いわゆる経済的リベラリズムが成り立たないことは、とっくの昔にはっきりしていた。こうしてリベラリズム思想の周りには不快な連想を誘う空気が形成された。そもそも思想、いや思想というよりそれを表

現する言葉は劣化を免れない。人間の利害というものには、宗教的生活と結びついた最も高尚な言葉すら歪め、汚してしまう力がある。「リベラリズム」という言葉も、非常に劣化させられた言葉の部類に属する。しかし劣化してないような言葉は多くあるだろうか？　われわれの多くの言葉にいまだ光に満ちた、行動的エネルギーが残っているだろうか？

リベラリズムの劣化は目的と手段の混同、生の精神的目的を物質的手段で置換したときに始まった。人間の自由、人間の権利とは、高潔な精神的目的なのである。あらゆる政治・経済制度はこの目的を達成するための相対的かつ一時的な手段にすぎない。人間の自由と外化されることのない権利の中に高い目的を見るとき、リベラリズムは不完全ではあるが、疑いのない真理を主張しているのである。しかしながら一時的で、相対的な政治的、経済的手段に絶対的といってもいい意義を付与するとき、社会組織の新たな形態を模索する中に、自らの抽象的原則の許しがたい侵犯を見始めるとき、リベラリズムは退化し、解体する。この土壌の上に、リベラリズムと社会主義の間の複雑かつ錯綜した関係が生まれたのであり、それは抽象的な公式では表現できないものである。

諸君は永遠に敵対し、相容れない原理としてリベラリズムと社会主義を対置させる。これは抽象的な公式というものがすべてそうであるのと同様に、相対的に正しい。リベラルなイデオロギーと社会主義のイデオロギーは異なる現実の課題をめぐって形成されたものであり、それらのパトスは源泉を異にしているのだ。自由への意志がリベラルなイデオロギーを生んだ。社会主義のイデオロギーを生んだのは日々のパンの保証、基本的な生の欲求の充足への意志である。そしてリベラルになるのが、基本的な生の欲求が満たされ、保証された人々であり、自分の生活を自由に開示したいと欲する人々であるのに対し、社会主義者となるのは、もっと基本的な生活要求の充足が必要とされる人々である。個人的な見通しでは社会主義はリベラリズムよりも基本的である。ところが社会的見通しとなると、この関係が逆転する。

原理的にはあたかもリベラルな社会主義と社会主義的リベラリズムが想定されるかのようだ。リベラリズムはマンチェスター派や、経済的個人主義とは何の思想的関係も持たない。この関係はたまたまそうなっただけである。リベラリズムは社会改良主義と十分両立しうるし、人間の自由と権利を保証するますます新しい手段や方法を容認する。リベラルな権利の宣言は形式的な性格のものであり、不可譲とされる人間の権利の侵害がない限り、どのような社会的内容も容認するものである。一定の種類の改良的社会主義は社会的性格を持たないデモクラシーの極端な形態よりもリベラリズムの理想的根幹と一致するものである。逆の言い方をすると、リベラルな社会主義がありうるのである。改良型の社会主義はリベラルな原理に依拠しうるし、人権、市民権の宣言の枠内で社会の社会主義的改革を考察することもできる。リベラリズムとは社会主義の要素を取り込んでいるのである。一方社会主義はもっとリベラルなものになりうるし、単なる経済人だけでなく、個人生活の豊かさの権利、功利主義的制約を受けない精神の権利を有する人間をも尊重することができるのだ。しかしながらリベラルな改良型の社会主

義はもちろん、本当の社会主義ではない。リベラリズムと社会主義とは、相対的、一時的原理だということを、認めることが何より重要である。リベラリズムの信仰も社会主義の信仰も誤った信仰である。

リベラリズムの原理は人間生活の原理の一つであるが、唯一の原理、他を許さない支配的原理ではない。それ自体としてみると、それは存在論的根幹から切り離されたものなのである。リベラリズムは社会改良主義と同様に、より深い、内的保守主義と結合されなくてはならない。宗教的にはリベラリズムはプロテスタンティズムなのだ。リベラルな自由にはプロテスタント的宗教的自由にも見られるように、一端の真理がある。しかしプロテスタンティズムは教会と存在論的根源からは切り離されており、宗教的自由の原理を宗教生活の豊かさの中にではなく、抽象的に確立しようとするものだ。リベラリズムにも同じことが生じる。リベラリズムは社会の存在論的根源から切り離されており、政治的自由の原理を人間生活の豊かさの中にではなく、抽象的に確立しようとする。宗教的自由、宗教的良心の自由がその存在論的根源、教会生活の豊かさに回帰しなければならないように、人間の自由と権利もその存在論的根源、人間の精神生活の豊かさに回帰しなくてはならない。哲学的リベラリズムは唯名論の傾向を持つ。抽象的思想類型としての哲学的リベラリズムは現実の共同性、全一性と、国家、民族、教会の存在論的実在とを否定し、社会を諸個人の相互関係としてのみ認める傾向がある。

純粋にリベラルなイデオロギーはすべてを、唯一の実在としてのリーチノスチに移しいれる。しかしこの唯名論によって、最終的にはリーチノスチそのものの実在性も切り崩されてしまう。リーチノスチの実在性は別の実在性を前提とするのだから。このことについては、すでにこれまでにも再三語られてきた。合理主義的リベラリズムは存在論的ヒエラルキーというものを否定する。しかしこのことによって、リベラリズムは実在のヒエラルキーの一員としてのリーチノスチをも否定してしまう。より深く、より存在論的な原理と結合されないかぎり、リベラリズムは形式的原理に退化してしまう。個人主義的リベラリズムは歴史的に形成された全ての有機的組織から個人を引き離してしまう。その種の個人主義は個人を荒廃させ、個人が歴史から受けた「個を越える」もののすべて、つまり個人が類や祖国に、国家や教会、人類や宇宙に有機的に所属しているということを、個人からもぎ取ってしまうのだ。リベラルな社会学は社会の本性を理解していない。リベラルな歴史哲学は歴史の本性を理解するものではない。

一つの気運、世界観としてのリベラリズムは反歴史的なものであり、社会主義と同じ程度に反歴史的である。そしてこの側面から、リベラリズムは厳しい審判を受けることになる。リベラリズムを少しでも深く、根拠づけようとする全ての試みは、自然権に固執する。自然権を理想主義的に基礎付けようとしてしまったのである。しかしながら、自然権の思想は「自然状態」の信仰と結びついている。自然状態が歴史的状態、歴史的現実に対置されるように、自然権が歴史的権利に対置されたのである。自然権に関する全ての思想はとうの昔に呵責ない批判にさらされた。完膚なきまでに叩かれたのである。自然権を理想主義的に再生させ、カント哲学を援用して自然権に規範的な根拠を与えようとする試みは最終的な根

源、存在論的な土台にまで行き着くことがない。人間の不可譲の神聖なる権利は「自然」権とも「自然状態」の権利とも呼ばれえないものである。

諸君はいたずらに人権を理想化し、よりよい生活を目指すうえで、いたずらに人権にもたれかかろうとしすぎる。〈歴史的〉人間はやはり「自然」人よりもすぐれており、「自然」人の解放は悪を生むだけである。〈歴史的〉状態は「自然」状態より高次のものであり、〈歴史的〉権利は「自然」権よりも高い。不可譲かつ神聖なる権利を持つのは、「自然」存在としての人間ではなく、精神的存在としての人間、つまり恩寵を受け蘇った自然、神の養子となった自然としての人間なのである。このことは、人権の深い根拠は「自然」の中にではなく、キリストの教会の中に求めるべきだということを意味している。人間の魂の無限の権利は「自然」の権利ではなく、キリスト教世界の〈歴史的〉権利なのである。キリスト教によって開示された人間の魂は人間の「自然状態」ではない。なぜなら「自然状態」では人間の魂はひどく圧迫され、閉じられているからである。人間の魂は歴史的なキリスト教時代になって、深みから開示され、古代宗教秘儀とプラトン哲学だけがその先触れとなったのだった。リベラリズムの真理の一端はこの高次の源泉から汲まれたものである。

これに対し諸君らの「自然状態」や「自然権」は表面的である。〈歴史的状態〉、〈歴史的権利〉の哲学はもっと深い。完全な「自然状態」への信仰はとうの昔に崩れ去り、それは科学的意識ばかりか宗教的意識の批判にもたえることができない。人間はその「本性」において善良でも、無垢でもない。全ての「本性」は悪の中にある。「自然の」秩序、「自然の」存在では敵意と壮絶なる闘争が支配している。〈歴史的〉秩序は「自然的」秩序よりもより高次の存在状態である。ヒューマニズムは誤って「自然」人を霊的人間、つまり神の恩寵によって蘇り、神の養子となった人間と混同し、その範囲内で人間の否定にたどり着いた。二十世紀人である諸君は、十八世紀の残滓、二世紀前の脅迫観念から解放されるべきだった。どんな「自然」状態もないし、いかなる「自然」権もない。いかなる「自然」調和もないし、ありえないのである。

すでに十九世紀は諸君を〈歴史的〉なるもの、歴史的現実の深みへと向かわせた。そしてリベラリズムが自らを〈歴史的〉なるものに対置し、「自然的」なるものによって自らを根拠づけるかぎり、それは抽象的空論の中で退化してしまおう。〈歴史的〉なるものは具体的であるが、「自然的」なるものとは抽象だからだ。〈歴史的〉なるもの、つまり歴史的な有機的全体の中で「自然」状態の罪と悪が打ち負かされるのである。〈歴史的〉状態、〈歴史的〉権利より高次に立つのは《霊的》状態であり《霊的》権利である。

リベラリズムの理想に対する信仰はもはや不可能になった。この信仰がまだ新鮮だったころから、全てがあまりに変わり、複雑化してしまった。この信仰が人間本性に関する誤った理論、人間本性の非合理的側面を知ろうとしない姿勢に基づいていることは余りにも明白である。わたしたちは憲法をさほど信じていないし、議会制が全ての悪に対する万能薬だなどと信じることはできない。立憲制や議会制の不可避性、時には相対的有効性を認めることはできても、これらの方法によって完全なる社会を創造するとか、悪や苦痛から解放されると

信じることはもはや不可能である。誰一人そんな信仰を持っているものはいない。かくて最近のリベラルな立憲主義、議会主義の空論家はあわれな印象を与えるだけである。西欧における議会制が深刻な危機を体験している。全てに政治形態の枯渇が感じられる。そしてリベラリズムが政治形態をあまりに信じすぎるかぎり、それは現代の意識の高みに立つことはできない。

これと同様にあまりに経済組織を信ずるかぎり、社会主義は現代意識の高みに立つことはできない。これら全ての信仰は、古い合理主義の残滓なのである。合理主義は人間の体験を狭めること、完全なる社会の合理化を不可能にしている非合理的な人間本性を知らないことから発している。新しい時代の人々は、もはや政治、社会形態の救済力を信じることはできない。彼らはそれらの相対性を余すところなく知り抜いている。全ての政治原理は相対的なものであり、どれ一つとして、絶対的意義を主張できないし、どれ一つとして唯一の救済手段とはなりえない。立憲制への信仰は哀れな信仰である。憲法とは歴史的時代の要請にしたがって作られるものであって、それを信仰するのは無意味である。信仰とはもっとふさわしい対象に向けられるべきものなのだ。法治国家は偶像に値するものではない。そこにはある種の限界がある。法治国家とは非常に相対的なものなのだ。

もしリベラリズムに永遠の原理があるとすれば、それは何らかの政治形態や、何らかの代議制や権力の機構にではなく、人間の権利、人間の自由に求めるべきである。人間の権利と自由は例えば普通選挙法、議会制度等々よりもはるかに深いものである。そこには神聖な根源がある。しかしだからこそ人間の権利と自由はリベラリズムが与えるものよりもっと深い根拠、形而上的、宗教的根拠を要求するのである。リベラリズムの部分的真理は宗教的良心の自由であり、その根源はキリストとその教会、「俗世」の要求からの教会の自由にある。なぜならキリストの教会においてのみ、人間精神の無限の本性が開示されるのだから。キリスト教を抜きにすると、世俗的国家、世俗的社会の生身の個人に対する要求は、無制限なものになってしまうであろう。人間精神の自由は、キリスト教の殉教者の血によって勝ち取られたものなのだ。解放者を自認する諸君はこのことを理解すべきである。しかしながら諸君は自由の王国であるキリストの教会からの人間の解放を欲しており、こうすることで諸君は人間をもっぱら自然的必然性の力に委ねてしまうのである。

現代では純粋のリベラル、すなわち抽象的なリベラリズムの原理の表現者に出会うことはまれである。通常リベラリズムは非常に複雑化され、ほかのさまざまな原理と結合している。リベラリズムの純粋さ、空疎さは持ちこたえることができない。ある場合にはリベラリズムは保守主義の原理によって複雑化され、より深く、強靭なものとなることもあれば、中途半端な民主主義や社会主義、無政府主義によって複雑化されることもある。その場合リベラリズムは卑俗で脆い急進主義者のタイプを生むであろう。急進主義者である諸君はこの世でもっとも不必要な人種であり、もっとも表

面的で、自分ではなく他人のふんどしで相撲を取るもっともどっちつかずの人種なのである。諸君はそれに歯向かうことも、ゆだねることもできず、ただただ無力にそれをうらやむばかりのより左翼的な外来の革命思想を生きている。かくて諸君は本当の革命家、社会主義者、無政府主義者がそうであるように、悲劇的教訓にも、教訓的な試行にもなることはできない。急進的リベラルである諸君は、とことん擁護し、破壊的な左からの自然力に抗することのできるような確固たる原理を持っていない。この無力さにこそリベラリズムの産物、存在論的根拠を持たないリベラリズムの所産が感じられるのだ。国家、民族、すべての歴史的全体に存在論的根拠があるのか確信が持てない。かくてより極端で、断固とした潮流、もっと信心深く、狂信的な潮流が諸君を押し流す。リベラルな急進主義者である諸君はその精神構造から言って懐疑主義者であり、それ故歴史を動かすことはできない。

誤った信仰には無神論や懐疑主義ではなく、真の信仰が対置されなくてはならない。無神論や懐疑主義、自己分裂や右顧左眄、自身の思想がないために他人のふんどしで相撲を取ったり、外来思想に飛びついたり、これが急進主義者の特徴である。だからこそ保守的なリベラルのほうが急進的なリベラルよりも高いところに立っており、より原則的で、異質な思想に対し何を対置すべきかを知っている。個人の自由を擁護する自足的で抽象的な原理としてのリベラリズムは容易にアナーキズムに転化する。こうしたアナーキズムは非常に無邪気で、とても理想的で、破壊的なところなどまったくないのだが、実に無力である。例えばスペンサーはそうしたアナーキストである。フンボルトもそうであった。それは国家の自立的な本性をまったく知らぬもので、国家を極小にまで押さえ、徐々に国家を廃止しようとするものと表現できる。こうしたアナーキズムには本当のパトスはなく、行動力もない。それは理論的で、書斎的な性格のものである。しかしながらこうしたアナーキズム的偏向はリベラリズムを内的に弱体化させる。リベラリズムの全ての欠陥、弱さは、それがいまだ旧約的なアダムの形式的自由にとどまっており、新たな霊的に蘇ったアダムの、中身のある物質的な自由を知らないのである。（了）

（注）「リーチノスチ」については、巻末の一一一ページをご参照ください。詳細な解説及び渡辺雅司先生からの案内を付しています。

（編集部、記）

★★以上は、渡辺雅司先生が今から十年ほど前に翻訳したものです。今回が初公表です。ベルジャーエフ著『不平等の哲学』は全部で十四の書簡と「あとがき」で構成されていて、一書簡一テーマの内容となっています。今回の第七書簡「リベラリズム」以外では、以下のテーマが取り上げられています。――ロシア革命、公共性の宗教的・社会的根拠、国家、保守主義、貴族階級、デモクラシー、社会主義、アナーキズム、戦争、経済、文化、神の王国。（編集部、記）